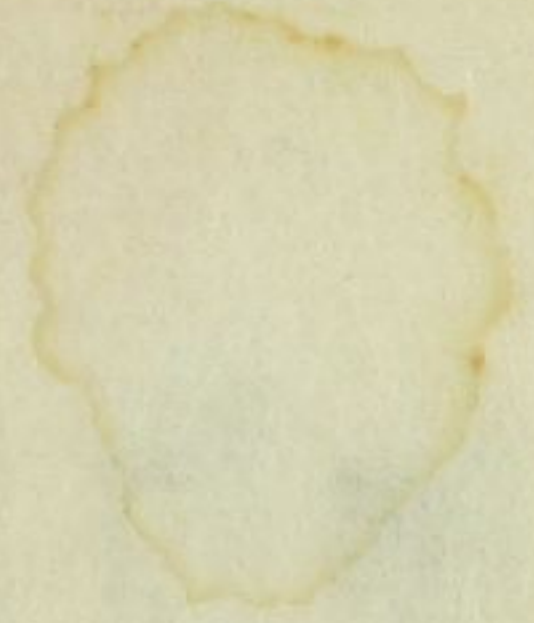




多分村歌

~ 5
1892





10



月乃すく小つるよむゆしと親かきさうけらふ
 世はあさな依り信し四王乃月切利はさひ
 てう果れたるの信しあおふふと色何とるまじ
 何をう虚と定はむ爰に江尾氏本翁先共
 長等山下は産く四十とをわきまうわたりん
 我師芭蕉乃門り入る其風皮膚層り通り
 其平心骨ふとみく終ふ終ふ探李神小入
 志のもしんれを業くとれゆらりくの家父道

けくく查實を於ひ茶欄小塔くすしり功
 國は醫すもくもかか泉石煙霞は病ふも
 茶舌きく社口まうわく懸しならり瘤とが
 ちりし風雲乃病と治すく表子う良薬
 よひくあつとま集を撰むく根以辛
 濟乃一松小託く高志梅と影可平小序
 を請心友は情とすく社あくく薄言は
 綴りく机よ授は出の梅武藏野れを不境

わくわく乃白をり給ふと千鳥梅りとれぬ
ぬりり式と其角何某う許り去をこせり
惜哉其撰ふわぬ遠よりあかの湘臣泪
羅乃わり梅をさす統るふ松りといふ人
あましく唯ふまはれあうあうとやくもた
かゝ舞悲しあうわぬあうと乃秋黄泉
乃容と我をわらるる田入宰院乃二龍進
悼れ教向を撫ひく様ふ彫り志るあう

侍る世書は序とすふ帯ひ固く辞りて
とゆふとさし給極乃ちふふ蒿里の曲は
歌ふとさし先醒れ秀や一毛ゆる奉揚
し一畢

享保七歳、吉士、庚十月

蕉門一老
千那

題辭

夕 秋 花 紅 似 錦 綺 如 錦 也 老 乃 秋
ま の ふ ち 木 槿 々 々 朝 良 々 々 夕 乃 秋
此 二 章 也 先 師 尚 白 老 人 の 病 中
の 吟 あり 々 其 月 其 日 此 命 終 小
臨 々 我 丁 々 小 世 世 を 見 々 々 々 々 々 々 々
今 々 々 々 辭 世 此 句 を 案 々 々 天 心 を

夕 乃 秋 花 紅 似 錦 綺 如 錦 也 老 乃 秋
乃 如 々 々 小 見 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
残 々 々 々 々 々 々 上 の 々 々 々 乃 袖 々 々
あ ま り 々 々 々 々 風 々 々 身 小 々 々 々 々
爰 々 々 哀 挽 此 詞 を 叙 々 々 例 々 々 々
夕 秋 哥 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

挽歌

鳴あふ子 夜雨乃墓此虫如囊 千那

沈や水月を音や々々終る心也 正秀

わくりきや七夕をく此りて是 定古

三千年此花と葉の 實は終り 我笑

涙くむあーもやうく心家の玉 拾山

蝸も表道をしふや 塚在竹 鎮阿

朝魚此形見を紙道 月此前 吐竜

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

花も葉も十日みしうと 齡哉 角上
 去りの葉や 花散る河も 長光り 素雲
 雜詠をおもへハ 風も糸も 薄 千沙
 早稲晚稻みのくま 終る行秋と 東湖
 扱待や 世に練貫れ 水も風も 萁香
 文臺りのこを 尾花散れ 雪 通雪
 世活や 行く花散る跡も 無垢世界 松髯
 襟も 花も 又も 又も 先く けり 其芳

舟も帆も蚊帳も とも 舟も終哉 冬山
 朱も白も 雲も朝露も 散れ 花 竜舌
 河も 一葉も 散る 花も 散る 可明
 かくち 花も 散る 花も 散る 一葉哉 汀松
 手向草も 散る 花も 散る 陸翁
 藤も 杖も 行末も 西に 月 休夢
 一葉も 散る 花も 散る 唐西
 彼岸一夜 舟も 月も 十九日 誘里

詩歌賦く豎り行く月や月地定 杉候

不二りく縁く月地入接や名地残り 紀北

實ハ飛く後世地詠や蓮乃 素勇

佛性地五字に下るや 草 豆人

蓮地更地土りかたりく舍利と地 阿童

椎敲を向く悔むや明れ月 玄黙

寺くかきく佛乃思そ杖乃 藪 樂入

台炭や今朝と洞地麻木箸 木住

佛果乃ろん千種地家やかかり水 玉危

夜や秋を一炊む肌く 夢風地吉 萬祖

銘くハ何と泣く心 煉地 風 若立

墨色も省ふかり 也秋志う歩 利角

物を向去くハ秋志地かりりりり 白鳳

露消ぬ多度地華表ハ千代の声 仙鶴

琵琶乃海やあきくいつく志 臺草 立吟

日菊れもくく葉志一葉う那 柳水

白くもや大伴比切菴世ふ妙く 暮四

秋乃くもや七つふさくく秋をくく 優士

濱菰を風お吹りくく只留帆 大圭

ゆくふ茶なかくくく此籬れ秋 李賦

雲をりく秋海棠乃 志々降 常田

まのりく火消くやさくく浪れ色 沙蘭

朝露や逢き天智れ草履取 江戶 治徳

老樂乃柳く成くくく 百里

印菴乃古矣 都く 敬柳 琴風

かみかみくくく大津れ高燈籠 治則

老翁く船長く鳩かく行朝露小 風竹

文月哉嗟哉小く是後今も各成 不立

七月は人を問くく水次手 貞佐

芭蕉葉り水ひくく筆れ跡 新甫

蓮乃葉小く法をくく 法竹

居りとあけ身くく彼地も行遊 尾張 露川

山に錦着る人老一期のれ 十竹
 菩提樹に實や、落る日をかきとり 一秀
 ひ之行誓ひ乃繩を鳴子哉 推之
伊勢
 立雲に其日や、西へつり鳥 若狭 滋説
 中と在夢しく我目ふえぬ萩は上 如江
 捨くもる木影、花や杖ひの 越中 桃化
 雁の羽に雪ハ我うたふこころ 林紅
 望もくも雲津を去り下 鮮和

玉乃緒まをく化く白く秋は雲 し子
 然とあ敬く見えぬ柳哉 萩人
 白雲小舟のけしきや、帯はち 角埜
 朝衣は日か持溜く散るり 巴群
 稲妻や、夜伽に窓ふ何とれ 壺江
 悲しふは美蓉より着るは曇哉 嵐詞
 行道ふとられくかれく来の声 巴箭
 止らえぬ秋乃胡蝶を行末哉 秀之

秘旨古々とおとつる琴光朝飯後 圓入
足袋をそくうぬふころ風俗 明
作と姫の洞ハ愚癡も落よりり 池
その文見てもさきころつと笑りふ 笑
さる糸鉤瓶のまじりて雲も郭公 鳳
遊行ふまじりぬ砂もくひもり 入
月ハ今朝残りて各此松槽 角
ハやゝ伯父席も尻乃穂とて文 陀

麻れ脚もむくもき我々斗十千 明
堅田平氏もたつと暖 廉 鳳
法外弦達塵も外も何もたう 入
秤もかけく 雖乃子をさか 角
わらひより天竺冠者も水走る 笑
蛇筆もまじり 五人 三人 入
腹巻乃透間此風や酒は胎 陀
をきかかしのねと此増ふかき 笑

舞花さくらさく交ふはらり
流渡花絲さる久世具利きく
灯を廬山おぼり来申
雙かくしき若しやさるる季
てんくも疲く枯れひらる象
ひらけうつ身流緩りおとろく
橋れあふ所さるる水鏡月
拂し子乃歌ふまらく歩止
鳳

苔乃下より出山此釋迦ト治入
とくはひ遊り近き確笑
十五夜ハ白ハ冷泉ハ小女房
爰ふるく免く海流日をるる明
花鳥乃讚不遊へと書き多り陀
松花みより志おそき天角

其二

白や黄尔塩かき多き泉の那 淡々
 秋一霞竹一弓の勢はあ 我笑
 弓張尔もとふ弓もや山は端不 大圭
 思ひもかきあ筆一を腰より 維明
 池乃面小鴛此少くも水は鏡 宰陀
 之何階積とくたひ子々 飛 利角

長持小陸此楫一之刀き 白鳳
 了んこ乃らふこえあふゆり 四入
 おけ不れをゆりぬ清水猛りす 李賦
 又飼鳥乃らりかゆ 石 執筆
 屋ま併此紋去則他過此縁 安
 友尔一霜 髪ももろり 終
 のま物も忘りて忘れやまふ 明
 其夜をくろくす棟尔庭鳥 陀

葛水之浪を起すは河下月
乳之齒はさわり初く春風
花の中かゝる如く人人志を
温泉此氣とさしとたふを
貴く不儉を教ふる橋渡い
飢氣乃さし不窮をい先を
二人咲室となりさし蚊を
龍眼肉ふあまふ多し
明

了もふもまねく今朝を社を右
芦邊ハ虹り分る節あり
切小ゆるは塵れ上飛く火吹竹
先祖志足袋へ頭を入くる
着とくや留守はははと母ふ
文箱乃中と古佛なりりり
明かハ天一神れのわく月
草乃沛幣や海志物事
陀 角 入 賦 主 鳳 笑 淡

盤涉乃圖竹小通不馬子此哥明
 鳥かこりふふしつと西と避圭
 紡績乃宿小相ひりふふしつと西と避圭
 中さるあふと錫ふ八芳——入
 散不也後成卿去杖此新陀
 鴻北脊寺——朧月照賦

其三

葦也身招此柱かろか——氷花
 名を在明乃叔去埋火芥生
 已うふ尔春此葛篁を荷ひかく輕人
 旅り放し色取かへ乃菓子仙鶴
 住志出ろく枝去さるる小蛇壳巴牛
 羅紗裁時去智意借ふ来り儿鬼

雲々采牧桶此蔓川 我笑
 細くハもきぬ 大工 廻 心 花
 浄くもり杜鵑花不台後才同士 鶴
 百筋 切く 萬靈 此 帯 人
 籠組此門と岡く俗芥手此をけ 生
 湯あがりくくふく色此木急 牛
 弓扶去氣くくくくくくく 鬼
 菊菊をくくくくくくく 忌作 一 笑

くら帯りく衰へびくく 早瀬川 花
 砥小毛 貴くく世けくぬ凡切 鬼
 甚盛并 此くく此此乳臭ひ 牛
 江戸 実者くく乃時此きく 真 鶴
 のけ物不富士と駿河此明去春 人
 耳 顆針 去 會 裡 小 趣 追 生
 繕くくハ入子梳とあくく 兔
 六く去病り 書判 去 穴 牛

券人草提あくん多草履取
心いふ吹乃嚏あ〜〜
香好此氣癖不成〜
何か〜尼と〜阿地釋迦
傘と小ちや〜
媒口此比喻ふ〜
肥後〜節〜
さすら神馬乃早示發

鶴
花
生
人
牛
鶴
笑
兔

降年ハ冬此と意蟹〜
善画〜高ハ碁石湯不淡
〜の〜願名角純毛む〜立
片撥〜多小肩乃催〜
人〜幼往菴此後乃花
不般ほ〜雪解〜の鐘人

花
牛
生
鬼
鶴
人

其四

目尔見之秋月子居之別六 圓入
 片使がる。文月乃 月 袁立
 かほさる乃車舎をうらみて 宰陀
 欄檻此橋 乃 幽なり 白鳳
 秋上乃初雪をうらみ座包 我笑
 おもひくあ乃給ふさい 楳入

存劣小蜘蛛此働く 松乃棚 立
 塵功記少とさうら子左木 陀
 すみくし乃岸小のなきハ笙此聲 鳳
 伊達小ちんを以隠あいらを 英
 恒間見小行水河の夕煙 入
 宿をわく乃影此舎り小 立
 しもし火此虫煮本を秋中て 陀
 中乃ハ身中一々廢敗此巻 鳳

望んれなう又やき庭す昔れ月 笑
化粧水行一 二の三の丸 入
あくらとく茶はうつゆれ立田山 立
狐々のいゝ 畏ふやまふと 陀
午時此雨降きうて云鳴蛙 鳳
横河乃るぬ一 布く大音 笑
一あし一此長刀やま一及也り 入
何し一の末小強ゆる暖簾 互

了杖持れ生飯くらえて飛鳥 陀
唐かひのらとふ産湯 敷く 鳳
袖とりて虫越れ因縁とく 笑
中一くにわらわらこれ太眉 入
ともゆき六雪此上少玄前渡り 立
折紙かりして鏡かけかけ 陀
笑あう引らとゆき濡れ月 鳳
野りけふたらと心此丘尾とあら 笑

冷くも親音より我力入
唯ひもやうあ毒消れ金立
寐を山まゆ半るる顔かた
星あぬくもあ登れ棟上鳳
何菩薩花を白文と後下り
七寶かきく瑠璃れ嚇り筆

其五

いれつうれ鋸小清——西乃雲 宰院
おこあに起る月ハ小夜半 利角
はちくも庭小煉れ聲 吹く 維明
そのまゝある髪れおつち路 圓入
掃く乃くゆく空も雪はも文吐 白鳳
手小沙を桶よいたるわく 滝 萬祖

河を季ぬ交枝とおぼえ此尾長鳥 表立
りふハ漢書乃友とかさるひ 我笑
筆一葉れ舌きまらぬ寒かり季 角
かろえまらるや申とまらふ也 陀
出らるる此君ハふす後の内よりき 入
た乃心はくひや備中ら留守 明
ろらハ周居水りひるきれ虹 祖
月らんしえ乃羊一肥さうん 鳳

紋石地下小残りくかり川掛 笑
五色乃あはれこはあ庭鳥 立
楠干し花とちりて水かき 明
山りりくハ里ハ 中ふ 角
源平れ今ハ乃とくふおき 陀
十尔けくや何婚禮れ沙汰 入
看經意真昼中ハ名小立て 立
源广水園も季あ代丸腰 陀

風氷のひく夜く小鐘乃る鳳
うん蘊合志小袖うぬく
退くん嶮我ふとくも小角隅
目小卯のそねれさしき日や
洗手洗の底ぬる月の朝朗入
秋風志音管養うおふ鳳
道たのし宇津乃山也れ萬ふら
真ふさくきく天乃のりう角

うくはハ玉膝小脈やかうん
たはくくしう志水海ハ水陀
いふたられ空況うけらる二日醉明
牛ハうきかうそれううれ網入
らふ夢ぬりきう式うあ踏て行鳳
鍋乃るく焼曲水の右角

老齋子行狀

苗宰陀誌

口師尚白老人姓ハ多田黨に於て塩川成らるゝ
 天正此に故きて河へた先今此氏ハ江元より季
 父了れ父とも不醫名代、こよ言りて我境不
 之、母方ハ妹田乃家此臣にて伊勢此朝徳
 此館不は、りれ此師ハ兼應乃比伊勢此
 國不、才往く初名此虎助と、了れ城命

此此呼是り季は、祖父也易よ、り、れ
 て考え後ハ愛名志らるゝ此ハ家業ハ父祖此
 高位高官不、り是ら川元禄乃初越れ富山此
 城主不招う是ゆれ、母やゆら、れハ辞、一、應
 こと下、行ハ津れ平、主病よ、此、遠交武城
 馳、々、急り、り、根を、ら、て柝、此、ち、り、
 ら、深川乃秋、不、何、々、晩年京極家を扶助、此、不、
 此、丹後お名、ら、り、才、海、と、吾妻れ供奉、此、由、

しほく只湖南此月有嘯柝師之風雅入之五十
年也始六洛此真室成志了八半八原不ト小立り小後
芭蕉此翁志正風有り靡く了此名遠境有り何季
教業トて故郷ハ正凡此大祖二十余人乃門葉あり
了是の中此一人ありて上ヨ其角嵐雪去来凡兆
下小荷兮越人野水松風乃後るく千那ト共小
く此中列ヨるく之ト了此翁辛崎乃松ハ臆
ト吟ト一師ト北忠此軌ト了此翁奥羽公ト了り

常く松公木曾寺小休りり此つと志とくひて鳴り了
し列正秀許六酒堂此後ハ師ト公ト了此翁
湯ト了此翁了此恩公ワ了了日了了とやつねハ
きんとして先生ト了了師ト了了此花下ヨ基を
かく月乃前小一曲公諷トて老公を了了茶ハ
半百之古一心入茶何人是咄雪月風花ト傳ト
了了遠列此花卷ト了了了宗且了俺を了了ハ
了此茶ト了了了了何也扱入了此翁了了了了了了

とくくぬくく常ハ古器ハ故ハ和漢レ書畫ハ
變一草紙拙本と梅くゆふれ外ハ他ハ元禄レ
じう一門人旭芳うきり又人間レ四月と化レ也
と大和路ヨリ入リて此山ヲ登リてまきりふりれ
里ノかきねま雪とゆや一して吟行一とて武江の
川道遠ハ百里琴ノ風小吹らるは秋芳レ句ハ
吐や日るくく了れ地と去ハ尾張レ家川伊勢其友
小侍スレき支考ハ作レ住来ふり以惟然ハ

乙九死ハたききれれ志一素堂
木目レ友ハ掌草乃門ハ敵くれ余レ風士爰小
立くちく才とよおれ一宛園をするく不似
らん師既レ七十有余りく流行れく
此小入レも不易レ大人レ身健レ眼ハ
月雪ふりく一耳ハ雲われやくまをさ
少何也皇甫謐ク痺馬相如乃渴たふは
何く折くハ頭痛くくわふは

ふきやたれ咽よ瘤かゝるまゝにふかきれま増
くろれ囊重——きや例乃頭痛ハうひをれて
お止りこれれ得かゝん位歡——つねにこれを扱々
愛すことしう季小町う袋中をいふとちて清瀬の
袋にたれ候つるまはの是ハ杜預う瘡とらり
ゆんや樗里う知囊れゆり——きことと或は
奥——或はたはうひをいふや季去と平れ秋
贅行乃二字と求く自老贅子と呼く後

ろとよと魚れ吟のまき——五月乃未了れ
解んとらふ位候や——まほわ水無月乃
ほくろひまきくこれ袋乃玉の緒や今切う
危ふ事た門人等ハ我笑子う喜水れ亭と書
して誠と抽く聖神と祈る孝子維明ハ潤
とがして華陀う匙はうくともうれ給うて
ゆい後ハうう良書は考ふりれを壽れぬホ
と月と残まら暑はらうとれぬ也文月ゆとて

九此夜簀ノ圃扇ハ花々身と秋風乃吹不
かろすれ風肌骨と氷もあつらうの涼し
ま空と妙光山不遠先整れ傍小一准と
築くろれ陰はほて夕秋奇を現ふとの
誰門人苗宰陀也

大練忌廟参

供菊詞

苗宰陀

牡丹ハ花れ王といふも 賤きれ荒らぬ
桜瓜誰うあつらん ともぬ帯此まとの
萩よ手白乃名何あふ ともは徒れあまう返
菊心うれ友がぬは ちれ佛はなきる
月もあつれ世も佳う起て 志すれ石乃木葉かたれ

挽詞并序

蓮二房

世不人のほろけふ物々朝歌を志すきと人
れとこれハはくまれをまこてれやう
かうとと先とらきんかうこれ世をき
見うあさひうあ世不き人のもちを物ハ
夕歌の志れ秋小がほへく吾歌れはせり
命とまきものまけ朝顔乃かひかふ色もぬ
くすあ萩萩とれを花やうかう中不

老の友なりくまなりりそらん人乃無ふりあま
心亦そがくあうは爰り湖南志尚白老人ハ
その夕歌を志き嘆くくこれ老を老の相と
くあまら秋はなりくハ乃風なりあま
霜なり枯なりんハ乃風なりあま
ろたれを志きまそは世れ月と見るとや
と月あまを志きまそは世れ月と見るとや
中れなりりあまら減ふは老ハ醫門ハ

名高く風雅々我輩は先生なり故は
血脈をいふ事ゆるく虚実なり変化は眼ハ
鼻とくより世情は流行ハ心成まそハ
ひうとせら松はその名ら季くや中
はを志れ梅乃志き名と志残ハ
又歌は一句なり可を辞きハ
ふはこれあまら風雅なり白因は友
なり

其詞

世に中らむ何ふきとん
花をみればしものふり
我が心もいふまゝなり
松を何れ乃袖なりけり
その友なり心ひりけり
世に中らむ何ふきとん
花をみればしものふり
我が心もいふまゝなり
松を何れ乃袖なりけり
その友なり心ひりけり

此の巻ハ師 篋 筭 あり 藏 せり
一 年 一 月 一 日 今 下 板 也

次表 一 竹 子 ぬ

古寺翫月

芭蕉

月 尺 歩 為 座 あり 心 けり 花 散 ち ぬ
庭 乃 枿 け 葉 ち の 虫 けり 打 ち 色 尚 白

火桶ぬる 忘れは縁を身より
別當殿乃 古ん 杖持 采 蕉
尾改のめてしりり塩小廻 全
百家志りては 川 水 上 白
寐 冥 人 ぬ 薬 師 堂 全
雨乃曇りり 昼改初と 蕉
一むしりぞくま 残る市北草 白
這うる子れ 飯はう世は蕉

のそうとほしりり油筒 白
ゆわと踏まらりり色院 蕉
月乃前おえとてある小屋は宿 白
枯梗も 明や 夜すか 乃出 蕉
位教る 髪ハ黄色り 秋當へ 白
大工乃 損をいのる 迂官 蕉
三石れ猿樂やとふ 芸はう季 白
ハツしりりり春は吹降 蕉

馬の白根の雲に云ふかき
うらねる馬小丁くむ襟巻 白
商人乃腰り指さす綿秤 蕉
物よく志や海をいさくしれ白 白
蒜乃香たより志持たれぬ恋をく 蕉
暑やりしとる水無月れ蚊屋 白
蛸志聲はくくもる玄因番 蕉
高官跡赤名盆を来りて委 白

蒼茨仁り粟れ葉白風多や 蕉
随分ほそ交小乃三日月 白
きものとりれ城りの布道ハ一里半 蕉
さへも鳴く海布くきすくれ 白
西行れ世言乃可此夕間暑 蕉
小草ちくくし碧き色なりり 白
薄雪ゆやくく晴く色白れ空を 全
水汲くく捨く霄乃茶 蕉

意可けく崔をいし軒孔花蕉
折漣垣作いりく、結露台

老贅子咨嗟人情吟戒物態多
干茲矣臨其終也有言開卷二章
是也於是友人門生或遠或近皆
為歌寄哀以慟其長逝僕等繕寫
成篇刊行四方亦區々之所不可
不罄者也

享保七年龍集壬寅十月日門人

百老館宰院

二月坊圓入

謹識

京師

橘屋治兵衛梓行



